創刊号

発行日：平成９年６月11日
発行者：医学部広報委員会
印　刷：やまと印刷株式会社

弘前大学医学部広報紙

医学部ウォーカー

１面：学部長挨拶他
２面：学位論文予備審査
2~4面：新任教授紹介
５面：ジャマイカ見聞録
６面：弘前医学賞紹介他
題字　医学部長 遠藤正彦氏筆

医学部ウォーカーの発行によせて

医学部長　遠藤　正彦

医学部に求められているもの

今、弘前大学医学部は二十一世紀に向けての大学改革に、確実にその歩みを進めていると、誰もが共通にその実感をいだいている。求められ、期待されている部分の大学改革は、医学部保健学科の設置や附属脳神経疾患研究施設の改組であり、それは外部からもわかりやすい。一方、文部省の「21世紀医学医療懇談会」の第一次報告は、社会人入学等の入試制度の改革や臨床教授制の導入等システムの改革である。しかし、本当に我々に求められている改革は、医学・医療の教育・研究者・診療従事者としての内なる意識の改革である。

医学部の改革そして問題

弘前大学医学部は周りに競争相手となる大学がないままに、それは地域医療への貢献を中心に創立以来五十余年を安泰に進んできた。しかし、気がついてみると、いつの間にか新設の医科大学にも論文公表数や、文部省科学研究費の採択数等で遅れをとっていた。こうした自覚が原動力になって、弘前大学医学部の内なる改革が数年前から着実に進み出している。ここ数年のうちに、医進課程廃止六年一貫教育の開始、学位論文審査方法の変更、教官選考方法の変更、大学院入学者選抜方法の変更、大学院修業年限短縮、学部学生入学者選抜方法の変更、弘前大学医学部学術賞の設置、等々、改革にいとまがない。そして、更にきわめて重大な問題に向かって進んでいる。教官任期制の採否、講座・部門新設に関わる教官再配置、兼業に対する自己規制、情報公開制への対応、そして外部からは社会人入学制度の導入、メディカル・スクール（四年制大学）構想の具体化、国立大学医学部附属病院の民営化等々、医学部の存続に関わる問題がつきつけられている。

広報紙発行の目的

こうした問題に対する教授会での討議内容は、教授会報として少なくとも公表されてきたが、その内容の詳細がわかりにくいとの指摘がなされてきた。このため、教授会以外の構成員である教職員、院生、学生に、今医学部で起こっている諸問題に対する共通の理解を持ってもらうために、広報紙を発行することとした。それがこの「医学部ウォーカー」である。このことによって、医学部内の諸問題に対する関心の高まりが期待される。一方、現在の大学改革には、時代の先見性と地域社会との連繋、そして大学としての特色を打ち出すことが求められている。そうであればこの広報紙は地域社会に対しても、開かれた、そして地元に密着した医学部としての優れた連繋の手段となることが期待される。

こうした目的で本広報紙が発行される運びとなった。教授会の全面的支持と、これをうけた広報委員会（委員長　棟方昭博教授、新川秀一教授、中根明夫教授、佐藤敬教授）の短期間の精力的努力によって、ここに「医学部ウォーカー」創刊号が発行される。この広報誌の発展は、当医学部の発展と表裏一体であると思われる。力を合わせて本広報紙を育ててゆきたい。

附属図書館医学部分館長に工藤教授が就任

―図書館の改善に向けて―

鈴木壽夫附属図書館医学部分館長の退官に伴い、工藤　一教授（病理学第二）が後任として、四月一日付で就任した。工藤新分館長が医学部分館の現状と将来について語った中で、特に、次の点について早急に検討を加えたいとしている。

一・現在、分館の絶対的なスペースが狭く、学生や教官が腰を落ちつけて利用できる場がないことを指摘し、分館の重要性をアピールし、現在、さらに、医学部の将来計画を視点に置き、スペースの拡張を目指したい。

二・オンラインによる文献検索ネットワークを拡充し、各研究室のパソコンで文献検索が出来るようにする。即ち、電子図書館化を推進する。また、分館の一部を使って学生にコンピュータを開放しているが、事務作業などとの混乱があるため、さらに整備し、改善する。これらのことは、医療情報部の協力で行いたい。

三・用語辞典等、専門に関わらず医学部関係者が利用できる図書の拡充など、医学部図書館として本来不可欠な図書内容の充実を行う。そのために、予算等、諸問題が出てくるため、図書委員会の活性化を行い、その機動力を発揮させる。それに伴う措置について、医学部の理解と協力をお願いしたい。

四・図書館の開放をしたい。ひとつは日曜日の開館。もう一つは大学病院外で働く医師も容易に利用できるようなシステムを確立したい。将来は一般市民も対象にした利用システムについても検討したい。

「これらのことを実現するために、その基本は医学部・附属病院のひとりひとりの図書館への関心と理解が必要である。」と新分館長は結んだ。

（中根記）

学位予備審査はじまる

研究科委員会は学位論文の審査過程において、平成9年度より学位予備審査を行うことを決定した。審査は公開で行い、"（1）学位申請者が主たる研究者であるか。（2）研究方法は適切であるか。（3）新知見は何か。"について主に審査される。申請者は予備審査会において、研究の内容を10分間で10枚以内のスライドを使って発表し、5分間、3人の予備審査員や他の審査会出席者との討議を行い、前述した3項目について判定される。場合によっては論文の手直しや追加実験などが求められることも考えられる。

予備審査委員の構成

申請者は指導教官と相談し、博士の学位を持っている医学部および附属病院の講師以上で申請者の研究分野と関連のある教官6名を選ぶ。この6名には教授が1名以上含まれていなければならない。また、指導教官は予備審査員になることができない。この予備審査員は研究科委員会において右記6名を参考にして3名選出される（うち教授1名以上）。

審査の日程

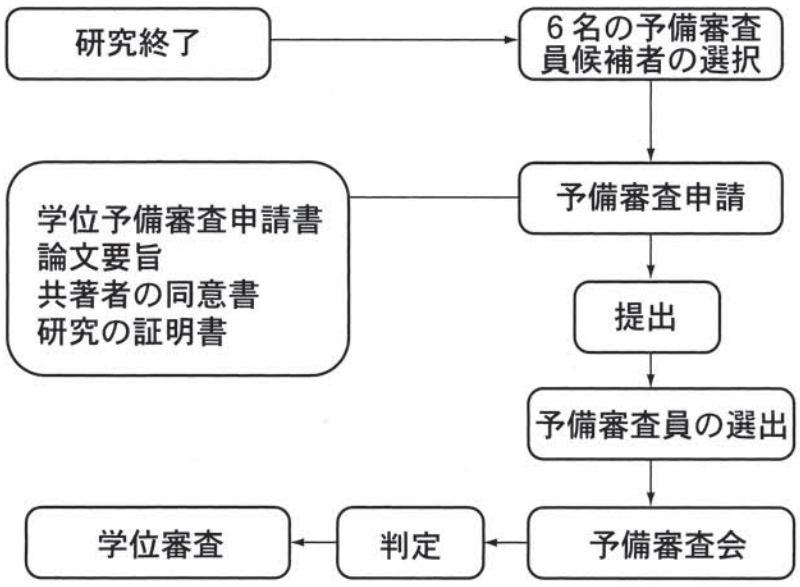
平成9年度予備審査申請の提出期限は甲が9月22日（月）、乙が平成9年4月21日（月）（本年度は提出者なし）、9月22日（月）、11月4日（火）となっている。申請の際の必要な提出書類は（1）学位予備審査申請書、（2）論文内容の要旨（2000字以内）、（3）学位申請にかかわる論文の共著者の同意書（共著者は申請者以外5名まで）、（4）申請者が当該研究に重要な役割を果たしたことの指導教授の証明書、の各一通である。

本年度は甲の予備審査会が11月6日（木）、13日（木）、20日（木）、27日（木）の午後に行われる。また、乙は6月上旬と12月下旬にそれぞれ1回と甲の予備審査会と同時に開催される。なお、乙の予備審査申請者は、所定の外国語試験に合格し、研究科委員会で学位申請資格ありと認定され、学位論文の主たる内容が関連専門学会において申請者自身によって発表されていなければならない。予備審査の結果、論文の提出が認められた者は従来通りの学位審査を受ける。この予備審査制度は数年間の運用を経て、改訂されることが予定されている。

なお学位予備審査についての問い合わせは学務課専門職員（内線5206）まで。

（新川記）

予備審査のながれ



新任教授インタビュー

生理学第二講座
藏田　潔教授
（インタビュー　佐藤教授）

藏田　潔先生は昭和二十九年北海道札幌市のお生まれで、出身高校は札幌南高校、昭和五十五年北海道大学医学部を卒業と同時に生理学教室に大学院生として入られ、昭和五十九年北海道大学助手、昭和六十二年東北大学助教授を経て、本年四月、本学第二生理学教授に就任されました。この間、昭和五十九年から三年間アメリカNIHに留学しておられます。以下、藏田先生にお話しをして頂きました。

――臨床医になるお気持ちは無かったのですか？

「臨床も全く考えなかった訳ではないのですが、医学部の一年生の頃から出入りしていた加藤教授の生理学教室に迷うことなく入れて頂きました。当時、私の師である丹治先生（現　東北大学教授）がアメリカから帰国され、NIHで習得された行動課題遂行中のサル脳から神経活動電位をモニターする方法を北大でも確立して活発な研究が進んでいました。私は、脳の活動が目のあたりにできることに大きなインパクトを受け、この道に進みました。従って、医師免許は持っていますが、全くのペーパー・ドクターです。」

――これまでの研究を簡単にまとめて頂くとどうなりますか？

「一言で言いますと、課題遂行中の動物の脳の神経活動の解析ということです。一貫してサルを対象に研究し、脳の機能地図を作ることに力を注いで来ました。サルの脳とヒトの脳には共通点が多く、サルを用いた研究がヒト脳機能の解明に大いに役立ってきたのは事実です。これまでの成果を基に、今後は、言語・思考など、高次機能にできるだけ迫って行きたいと思っています。」

――研究の今後の展開についてもう少し説明して下さい。

「これからの課題として特に重要なのは、"結合問題"と呼ばれる機能の解明です。青森県に因んでリンゴを例に説明しますと、例えば赤いリンゴが枝から落ちるのを見て、我々は"赤い"という色、"リンゴ"という形、"落ちる"という運動を瞬時にして統合して認識しています。色、形、動きを個別に認識する機能についてはある程度わかっているのですが、それらを統合する機能についての理解はほとんど進んでいません。同様に、脳内の機能連関、例えば運動皮質と小脳や大脳基底核との相互作用についてもまだまだ未知の部分が多く残されています。更に、従来の生理学の手法は短時間の行動の神経機構の検討には有効ですが、例えば練習による運動機能の向上のような、長期間の変化の基本となる神経生理学的機序の解明には不向きです。この問題は脳の老化のメカニズム解明にもつながることですが、そのためには、生理学のみならず生化学・薬理学・分子生物学・臨床神経学などが協力して脳を多面的に捉えていく必要があります。

最近、各分野の力を結集して脳の機能連関や高次機能を解明していこうという大きなプロジェクトが日本で始まりつつありますが、私自信もその一端を担っていきたいと思っております。そのことを通じて、この弘前大学で、より一層の研究の進展と人材の育成を計っていきたいと思っております。」

――弘前は以前一度来られただけだそうですが、まだ短い間ながら実際に住んでみられてどうお感じですか？

「弘前を大変気に入っています。この研究室の窓から岩木山が眺められ、しかも空気もきれいですし、住宅や通勤事情など、学問をする環境としては最高だと思います。今や情報化社会を迎え、中央から離れているからといって情報が不足するということも無いと思います。この弘前から世界に向けて情報を発信していかれればとも思っています。」

――仙台に比べて、特に文化面での生の情報を得る機会は必ずしも多くないのではと思いますが……？

「そうかもしれません。インターネットなどの普及で、最低限必要な情報は十分得られます。一方、例えば私はクラシック音楽のファンですが、実演に接する機会は確かに少ないかと思います。しかし、情報を十分生かすためには環境も重要な要因の一つですし、音楽に関してだけいえば、いろいろな楽しみ方があると思います。」

――クラシック音楽がお好きとのことですが、先生の趣味についてお話し下さい。

「子供の頃、多少ピアノを弾いていましたが、今は自分で演奏するというよりは聴くのが主体です。音楽ならなんでも聴きますが、特にシューマンのピアノ曲や歌曲が大好きです。オーディオにも凝っていて、アンプやCDプレーヤーの一部などは自作のものを使っていろいろな音を楽しんでいます。」

――最後に、医学部ウォーカーの読者にメッセージをお願いします。

「できればこの弘前の地でずっと研究に邁進して行きたいと思っています。どうぞ宜しくお願いします。」

新任教授インタビュー

外科学第二講座 佐々木 睦男教授

（インタビュー　棟方教授）

佐々木先生は昭和十七年青森市のお生まれで、出身高校は青森高校、昭和四十三年弘前大学医学部を卒業後本院第二外科に入局されており、消化器外科学の診療研究に専念しております。

第二外科学の教授就任にあたり、抱負などについてインタビューしました。

――この広報紙は学生さんにも配布する予定ですのでお聞きしますけれども、先生がお医者さんになろうと思われたきっかけはなんでしょうか？

「何時も答えに困っています。私は高校時代から特にこれといった目標ははっきり言ってございませんでしたが、受験近くになり長兄の死に直面したことも理由の一つかもしれません。大学を卒業する段階におきまして癌―腫瘍について大変興味がありました。私はかなり気が短い方なので、〝手術で癌を取ろう〟というのが外科に進んだ理由と言えます。」

――消化器外科の領域の治療法が内視鏡導入などかなり変化して来ましたが、先生自身この辺の将来はどういうふうに発展して行くとお考えですか？

「これは私は非常に発展すると思います。従いましていわゆるこれまでの外科医が携わってきた分野のかなりの部分がこういった先端医療といいますか、そういう方向に移行していくと思います。しかしながら、こと癌に関しましては、病態から治療まで基礎的な研究を含めまして解決されない限りは、我々の外科の分野というのはずっと残っていくと思います。」

――学部・学生に対する教育についての抱負は？

「大きく分けまして二つのことが考えられます。その一つは、最近は非常に知識・技術が発達していますので、最先端の医療の教育が大事かと思います。これを縦糸としますと横の糸としましては、消化器内科をはじめ他科との関係をしっかり連携をとる必要があります。つまり縦糸と横糸とのバランスのとれた教育が必要であるというふうに考えています。もう一つは、最近の学生は勉強しなくてはならない事が非常に多いので、どうしても勉強ばかりという傾向が無きにしもあらずという感じがするわけです。私は勉強の他に、相手の気持ちをよく考えるつまり患者サイドに立ってものを考えるといったような、いわゆる人間的な面をもっと強調したような教育ができればと考えています。」

――卒後教育のお考えを話していただけますか？

「先ほどの学生教育にも通じる面がありますけれども、やはり消化器外科が消化器だけということであればどうしても限界がございます。そうしますとどうしても弘前大学でいいますと第一外科との交流をはじめとして外科系の他科との関係などが極めて重要になってくるというふうに考えています。」

――先生のご専門とする肝移植について少しお話をうかがいたいと思います。

「肝移植につきましては、現在私がやっているのは生体肝移植です。もう一つ第一外科でメインにやっている研究が脳死肝移植ですが、これを分けて考える方もたくさんいらっしゃるんですが、肝移植ということから考えればどっちが良いどっちが悪いといった、メリット、デメリットは両方にあるわけでございます。従いまして両方の肝移植というのはいわゆる車の両輪と言われてますけども、そのようにこれから発展して行くものと思います。また、私が専門にやっております生体肝移植につきましても、現在主に子供さんの疾患に対しては脳死が認められたとしてもドナーが本当に少ないわけで、これは今後残っていくと思います。適応に関してましてもこれからまた広がっていくというふうに考えています。その理由としましては、これまでは胆道閉鎖症などに関しましても長期の成績が最近非常にクリアーになって来まして、移植が必要だということがあらためて示されて来ているわけです。その結果、この肝移植というのはもっと発展するのではないかというふうに考えています。」

――研究面での肝移植の課題は？

「私がこれからメインにやっていきたいと思いますのは、ご承知のとおり日本では肝臓癌が非常に多いのですが、それに対して外科的な治療に限度があるのが現況でございます。ただ世界的に見まして肝癌に対しての肝臓移植は成績が悪いのも事実です。その理由を考えますと、術後免疫抑制剤を使うということが、いわゆる体内に残っていると思われる癌細胞を賦活する、そこでまた再発が起きるという可能性が非常に大きいわけです。従いましてドナー特異的な免疫抑制状態、つまり免疫寛容状態と言いますが、こういったものが生体で誘導出来れば免疫抑制剤の投与が必要でなくなるわけですので、肝臓癌に対する肝移植というのが飛躍的に伸びるんじゃないかと私は期待して、それに向かって研究したいと思っています。」

――一般診療にあたっての先生の信念というかお考えをお聞かせ頂きたいと思います。

「まず医療というのは患者さんがあって成り立つものであって、病院に患者さんがいらっしゃるということは色々な不安を持って来るわけであります。そういう患者さんに不安感を与えない、また患者さんの自己を尊重した医療というのが大事かというふうに考えます。第二には、弘前というのは青森県の一地方ですが、地方にいる人も現在日本で行われている最高の治療、つまり弘前にいても日本で行われている一流の治療を受けることが出来るということを目指して、これから患者さんの治療にあたっていきたいというふうに思っています。」

――地域医療についての先生のお考えをお知らせ下さい。

「病診連携といいますか、そういうことに関しては各地域の病院はその地域の中核的な意味合いを持つわけですから、各地域の格差をなくするという意味で、私は、もう少し大学病院と地域病院さらには地域病院どうしの間で人的交流を活発にいたしまして、その地域医療のレベルアップを図りたいというふうに考えております。」

――最後に、先生のご趣味とかをお知らせ下さい。

「私の個人的な趣味から言いますと、スポーツ全般見るのもやるのも好きで、先生とも以前からスキーでご一緒したこともあるのですが、スポーツ全般が好きです。教室としての行事といいますと、スポーツに関しましては医局対抗の野球大会、それから年二回の教室内のゴルフコンペと、冬になりますとスキー大会など、こういったものを定期的に催しております。教室のそのほかの行事としては、二月の雪灯篭まつりの見学で「かふく亭」にておそばを食べることや、四月の花見ですね。そして七月の医局旅行、十二月の忘年会などでございます。」

――医局野球のお話が出ましたが、北日本の病院野球では教授団も出場しておりますので、教授団念願の一勝をもたらしていただきたいと思います。

「はい。今からトレーニングをして頑張りたいと思います。」

人事異動

医学部

停年 9.3.31
二生理　教授　鈴木壽夫
二外科　教授　今　充

辞職 9.3.31
整形　助教授　岡村良久（青森県立中央病院）
皮膚科　助教授　石川博康（山形県立中央病院）
二生理　助手　新藤潤一（青森県庁）
法医　助手　藤田　一（新潟大学大学院歯学研究科研究生）
整形　助手　伊藤淳二（北秋中央病院）
皮膚科　助手　長島弘明（岩手県立磐井病院）
耳鼻科　助手　橋本敏光（青森市民病院）
放射線　助手　藤田猛志（むつ総合病院）
　　助手　樽澤信子（シルバー病院）
　　助手　西　直子（埼玉医科大学）

辞職 9.4.30
泌尿器　助手　梶原　哲（医員）

採用 9.4.1
整形　助手　岩谷道生（西北中央病院）
　　助手　石橋恭之（青森市民病院）
　　助手　藤井一晃（大館市立総合病院）
　　助手　中澤重信（医員）
皮膚科　助手　鳴海博美（大学院修了）
泌尿器　助手　梶原　哲（大学院修了）
耳鼻科　助手　冨永　健（青森労災病院）
　　助手　宮腰靖始（大館市立総合病院）
放射線　助手　青木昌彦（医員）
　　助手　野田　浩（医員）
脳外科　助手　金　奉均（いわき市石井脳神経外科・眼科病院）

採用 9.4.16
一内　助手　坂本十一（医員）

採用 9.5.1
法医　教授　黒田直人（埼玉医科大学）
泌尿器　助手　佐藤元昭（鷹揚郷弘前病院）
一生化　助手　須藤晋一郎（大学卒）

昇任 9.4.1
二生理　教授　藏田　潔（東北大学助教授）
放射線　助教授　佐々木泰輔（医学部講師）

昇任 9.4.16
二外　教授　佐々木睦男（医学部助教授）
二内　講師　藤野安弘（医学部助手）

転任（転入）9.4.1
二内　助手　福士智久（国立弘前病院）

転任（転出）9.4.1
一生化　講師　中村敏也（医療短大助教授）
二内　講師　三國谷淳（医療短大助教授）

休職 9.4.1
二外　助手　十束英志
麻酔　助手　大川浩文

附属病院

辞職 9.3.31
三内　講師　青柳和美（青森市民病院）
周産母子センター　講師　柿崎良樹（弘前市立病院）
三内　助手　神成一哉（板柳中央病院）
　　助手　小川吉司（板柳中央病院）
神経　助手　猪股　均（東海大学医学部附属病院）
整形　助手　秋元博之（公立七戸病院）
皮膚科　助手　原田　研（市立函館病院）
眼科　助手　加藤智博（むつ総合病院）
　　助手　小堀和子（青森市民病院）
耳鼻科　助手　一戸　学（大館市立総合病院）
脳神経　助手　木村正英（黒石病院）
集中治療部　助手　山谷　信（青森市民病院）

採用 9.4.1
周産母子センター　講師　佐藤秀平（西北中央病院）
神経　助手　篠崎直子（西北中央病院）
眼科　助手　久保勝文（青森県立中央病院）
　　助手　水谷英之（むつ総合病院）
　　助手　猪股　京（青森労災病院）
　　助手　秋田三和興（青森市民病院）
放射線　助手　篠原　敦（医員）
脳神経　助手　真鍋　宏（黒石病院）
　　助手　土生美樹子（板柳中央病院）
三内　助手　後藤　尚（青森労災病院）
　　助手　荒井宏治（大鰐病院）
小児科　助手　村井孝弥（大学院修了）
皮膚科　助手　松浦　修（金木病院）
耳鼻科　助手　猪股　京（青森労災病院）
　　助手　秋田三和興（青森市民病院）
放射線　助手　篠原　敦（医員）
脳神経　助手　真鍋　宏（黒石病院）
　　助手　土生美樹子（板柳中央病院）
三内　助手　後藤　尚（青森労災病院）
　　助手　荒井宏治（大鰐病院）
小児科　助手　村井孝弥（大学院修了）
皮膚科　助手　松浦　修（金木病院）
集中治療部

新任教授インタビュー

黒田　直人教授

（法医学講座）

（インタビュー　中根教授）

五月八日、赴任して、まだ一週間の黒田教授を法医学の教授室に訪ね、お話を伺った。

黒田教授は、昭和三十二年福島市に生まれ、福島県立福島高校を経て、昭和五十八年に東京医科大学を卒業された。同年、慶応義塾大学医学部法医学教室助手に採用、平成六年十月に講師に昇任、さらに、平成八年六月、埼玉医科大学に助教授として転任された。この間、平成四年八月から平成六年三月まで、英国ダンディー大学に名誉研究員として留学されている。

――赴任されて一週間ですが、早速解剖が続きましたね。埼玉医大と比べてどうですか？

「赴任当日の五月一日の午後から一つ、一昨日まで、すでに四件解剖致しております。埼玉医大の取扱件数が年間司法・行政合わせて百二十を若干越えていますが、弘前大学でやはり同じぐらいの数と聞いております。」

――まず、大学時代の思い出をお聞かせ下さい。

「大学にいる時は英会話のサークルに入っておりました。英語をやっておくことはそのうち役に立つべえ、程度ですね。他の大学の同じようなサークルの集まりなどに首を突っ込んで、毎回羨望の眼差しで英語の喋れる他の大学の学生を見ていたという日々でした。それで度胸が付いたと思うのですが、その後留学する時も、それほど物怖じせずに外国の生活に入って行けたと思います。」

――次に、法医学を専攻されたわけですが、やはりご両親の影響ですか？

「そうですね。冗談で私は、常染色体性劣性遺伝だと答えております。恐らく片方だけでしたら、逃げ出していた可能性が高いと思います。父親にもそうですが、むしろ母親に仕事の面白い面を、高校生あるいは大学生のとき、色々教えてもらいました。」

――それでは、最初から卒業後は法医をやろうと考えていたのですね。

「いや、そうでもないんです。最終学年近くになり、産科で赤ちゃんが産まれてくるのに感動し、新しい生命の誕生に携わる仕事が出来ればと思ったんですが、自分が向いていないことが直に分かって参りました。外科に強く誘って下さる先生がおり、次に外科を考えたのですが、外科に行く人が多く、これも面白くないと思い、結局法医に首を突っ込みました。最近は、法医を専攻して良かったと思う気になって来ました。一般の臨床の先生方とはちょっと違った所から物を見られるということもございますし、病気に罹る、罹らないにかかわらず、死なない人はいないわけですので、誤解を恐れずに言いますと、魅力と言いますか、非常に意義を感じる領域で、年々興味が増しております。」

――先生のご研究の内容を教えて下さい。

「これまで私は、司法解剖や行政解剖を中心とする症例研究を行ってきました。例えば、刺された傷があります。それがどうして出来たんだ、と考えるんですが、ある程度まとまった段階で、どんな凶器が推定できるか、どのようにやられたかといったことをまとめて創傷論と言っていいだろうと思うんですが、そのような研究が主体でした。それがさらに発展すると、交通外傷、交通事故の時にどういう傷が出来て、それが何故出来たか、どういう車によって出来たかということを推定する、というようなことを、症例の積み重ねで勉強するという研究をして参りました。」

――これからの抱負をお聞きしたいのですが。

「研究面では、これまでやって参りましたように、症例研究の積み重ねでスタートして、その研究結果が各剖検例に生かせればと思っております。とにかく解剖をきちんとやっていくことが一番根底にあります。それを資料として写真や記録などの形で残していくことが次の段階にあります。そして情報を整理して、出来るだけ多くのことでディスカッション出来る場を作っていき、最終的には、こういう場合こういう診断をするという、かつて臨床医学がやってきたことと全く同じことなんですが、出来る限り沢山の症例を丁寧に見ていくという方針でやっていきたいと思います。その時に、中毒であるとか、分析のことでいろいろ知恵を絞らなければいけない場合には、それ毎に研究していくとおもいます。」

――法医学でも、DNA鑑定が盛んですが、その信頼性についてどうお考えですか？

「親子鑑定ですと、検体が汚染なく充分きちんと採れますので、法医学の領域で応用できるかと思いますが、犯罪に関しては、微量の血液が落ちていたとしても、現場にあるということは、必ずコンタミネーションという問題が出て参ります。そういった問題がクリアーされない限り、それを証拠として採るというのは必ず危険を伴う可能性があります。過信は禁物というところでしょうか。」

――次に、学生の教育面について伺います。

「学生さんには出来るだけ分かりやすい症例をとにかく見てもらって、考えてもらう、ケーススタディを続けて各論的なことを理解してもらうようにしたいと思うんです。と申しますのも、今医学部の学生さんは大変忙しい状態にありますので、余り盛り沢山のことを学んでもらおうと思っても負担が大きいと思います。授業中に私がお見せする症例に対して、気持ち悪いでもいいですから何か印象を持ってもらって、それでいろいろ考えてもらう、そして、こういう場合にはこうなんだよ、ということを教えることが出来れば、と思っております。そういった教材を工夫していくのが僕の使命だと思っています。大学院の場合、学生が何を求めて来るかによるでしょうが、この教室では司法解剖や行政解剖を行うことで社会に貢献していくという使命を帯びていますので、やはりきちんとした解剖ができるようにトレーニングしていくことが第一だと思いますね。それは一朝一夕に出来るようなものではありませんし、プログラムを作ってもらえばうまくなるようなものでもありませんから、試行錯誤の状態がしばらく続くと思いますが、とにかく解剖を大事にやっていきたいと思います。」

――学生へ何かメッセージはありますか？

「一度は学生さんに考えて頂きたいことは、皆必ず死ぬんだよ、ということですね。その一割ぐらいは異常死、つまり突然駅で倒れてすぐ亡くなったり、結局病気だったという例が多いですが。そういった例を法医学が調べることになるんです。不測の死を迎える人が一割もいるというのは、一般の病気の罹患率として考えても高いと思います。そういった時に何も対策をしないとどういうことになるのか、そういったところを隅の方で支えているのが法医学ですから、まあ、たまには覗いて下さいな、というのがメッセージです。」

――最後に、抱負発表会を経験されたわけですけど、抱負発表会の感想や、改善すべき点がありましたら、お願いします。

「ええ、あのような緊張感を覚えましたのは、本当に生まれて初めてでした。ただ、何を話そうか、と考える時に、自分が今迄一番大事にしてきたものは何だ、ということをまとめるとてもいい機会だったんですよ。そういう意味では、私はとてもいい機会を与えて頂いたということで感謝致しております。ただ、準備をするのが本当に大変ですし、前の晩など本当にどうしたらいいのかと、途方に暮れたのが正直なところなんですが、それでも、とても貴重な機会ですので是非とも抱負発表会は続けて頂きたいと思いました。」

遠藤医学部長も大変喜ばれると思います。本日は、お忙しいところ、どうも有り難うございました。先生のご活躍を祈っております。

解剖体のための安置室完成

解剖体慰霊祭検討委員会（工藤　一委員長）が計画を推進していた解剖体のための安置室が完成し、三月十四日午前十一時から、お披露目された。遠藤医学部長の挨拶の後、参集した白菊会会長・医学部教職員・事務職員・大学院生・学部学生により献花が行われた。場所は基礎研究棟一階西端に位置し、階段スペースを利用することにより吹き抜けとなり、二階の窓からの採光により荘厳な雰囲気を醸し出している。「これまでご遺体との対面は、プレハブの安置室で行われ、ご遺族に申し訳ない気持ちであったが、これからはご遺族に満足していただける。」と、新安置室設置に尽力された加地教授（解剖学第二）も安心した様子である。この事業は、信仰の自由による解剖体慰霊祭のあり方の検討に端を発している。工藤委員長（病理学第二）の話によると、市の霊園内に埋骨施設がすでに完成し、今後、慰霊施設の長勝寺からの撤去、納骨施設の建設、基礎研究棟西北端の大黒松区画への献体慰霊碑の建立と周辺環境整備による「街角広場」の建設と、計画は目白押しである。なお、仏式による最後の慰霊祭が、五月二十七日に長勝寺でしめやかに執り行われた。

（中根記）

ジャマイカ見聞録

ジャマイカ国の要請による日本国際協力事業団（ＪＩＣＡ）のジャマイカ南部地域保健強化プロジェクトを弘前大学が中心となって担当することになり、今回、三田教授（公衆衛生）、神谷教授（寄生虫）、高嶋助教授（生涯学習教育研究センター）が事前調査のため現地に行かれました。三田先生にお話しを聞きました。

――まず今回のご旅行のスケジュールを教えて下さい。

「四月七日に成田を発ってニューヨーク経由で八日の午後、首都キングストンに着きました。キングストンで政府関係者や日本大使館関係者と打ち合わせをした後、マンデビルという南部の担当地域に移動し、保健機関関係者と協議したり実際の保健医療機関を視察して来ました。その後またキングストンに戻ってユニセフやＷＨＯを訪問し、また、保健省担当責任者との間で”覚書“を交換して日本には二十日に帰って来ました。」

――全体の印象はいかがでしたか？

「個人的には、ホテルも快適でしたし、食事なども問題ありませんでした。キングストンでは安全のため個人的な外出はしませんでしたが、他の地域は心配ありません。その点を除けば概して快適な旅行でした。」

――ジャマイカの健康問題を簡単にお話し下さい。

「ジャマイカ全体では、高血圧・糖尿病・心疾患などの成人病、AIDSを含めた性感染症、小児下痢症が大きな問題です。また、公害病としてボーキサイト採掘従事者の慢性呼吸器障害が特異な問題となっています。」

――問題の地域医療の現状はどうですか？

「マンデビルを中心とする南部地域は総人口五十万人くらいで、病院もありますが、日本で言うと中規模自治体病院から小さな診療所くらいまでの規模の保健センターがあり、家族計画や乳児検診・予防注射などの保健活動から救急医療まで多様な機能を果たしています。一般に、保健医療従事者に比べて患者の数が圧倒的に多いのが一つの問題と感じました。これは多くの医療技術者がアメリカに出稼ぎに行っているためかもしれません。もう一つの問題は、システムはそこそこ整っているにもかかわらず、人材を含めて有効に運用するノウハウが不足している点にあると思います。」

――弘前大学の果たし得る役割について現在のお考えをお話し下さい。

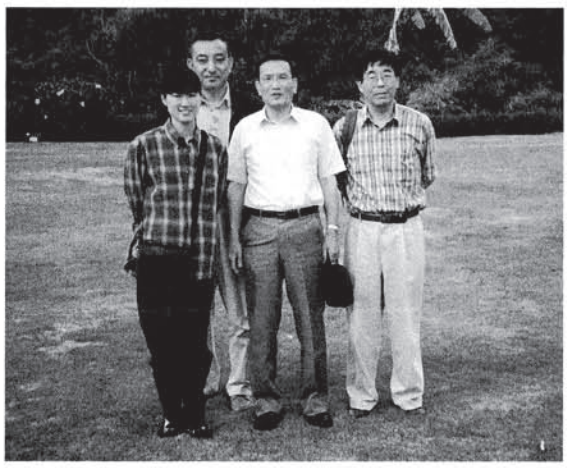
「特に成人病対策の分野でも我々が貢献できるところは多々あると思います。この八月にはもう少し長期の調査チームが再び訪問することになっており、来年からの具体化に向けて検討が進められます。」

ＴＶでお馴染みのナオミ・キャンベルや、ハリー・ベラフォンテの”さらばジャマイカ“とキングストン・トリオくらいしか知らなかったジャマイカが、急に身近な問題になって来ました。

（佐藤記）

マンデビルにある保健省南部地域事務所。

同じコーヒー園，ＵＣＣ創業者上島忠雄の銅像．ここの技師は弘前大学農学部ＯＢ（1987年卒　石嶺琢也氏）。


今回のジャマイカ訪問団．左の女性はＪＩＣＡの職員．ＵＣＣ上島コーヒーのコーヒー園にて。

保健センターの内部．家族計画の方法。
“Two is better than too many. です！”

保健センターの外観。これは中ぐらいの規模。

マンデビルの保健センター（新築中）にて，センターの責任者（右端）と。

保健省の女性局長．えらい人は女性が多い。

街の市場

同じく保健センター内部での乳児検診の様子．前列の女性は７人目の子供を抱える。

第一回 弘前大学医学部学術賞 －喜びの四氏－

平成八年度に創設された学術賞の記念講演が平成九年二月十四日開催の第百二十五回弘前医学会例会の中で行われた。引き続き医学部コミュニケーションセンターで同授賞式と祝賀会が挙行され、遠藤正彦医学部長の挨拶、続いて元村　成教授の選考経過報告、吉田　豊弘前大学長と佐藤悌二鵬桜会理事長の祝辞があった。今　充病院長をはじめ各科の教授他、同窓会役員が多数出席し、受賞者の栄誉が讃えられた。

この学術賞には二種類あり、独創的であり、優れた完成度の高い研究で、最近数年間に学術雑誌に発表された数編の論文を対象として、四十五歳以下の研究者に与えられる学術特別賞と、独創的であり、将来の発展を期待し得る研究で、最近二年間に学術雑誌に発表された一編の論文を対象として、学部卒業後十年以内の研究者に与えられる学術奨励賞がある。

学術賞特別賞

附属病院小児科
伊藤　悦朗　講師

この度、第一回弘前大学医学部学術賞特別賞をいただき有難うございました。今回、受賞の対象となりました研究は、赤血球分化のマスタースイッチと考えられる赤血球特異的転写因子GATA－1遺伝子の新しいプロモーターの発見と、GATA－1の発現が白血病細胞の分化マーカーになることを見い出したことです。今回の受賞は、私たちにとりまして大きな励みとなりました。今後とも活発に研究を進めたいと思います。

学術賞奨励賞

附属病院第一内科
坂本　十一　医員

近年、食物繊維と同様に小腸での消化吸収作用に抵抗を示し、大腸まで到達するresistant starchが存在することが明らかとなったが、その大腸癌抑制効果の有無は不明である。また、食物繊維の代謝分解産物の一つである酪酸に大腸癌抑制効果があるとの説が最近出てきている。そこで、ラット実験大腸癌モデルを用い、セルロースとresistant starchをラットの食餌に加え両者を比較した。結果は大腸癌抑制効果はセルロースにみられたが、resistant starchにはみられなかった。しかし、腸管内と糞便内の酪酸濃度はresistant starch群のほうがむしろ高値であった。

今回の学術賞授賞にあたり、鵬桜会をはじめ関係各位に感謝申し上げます。また、実験等で多々お世話になった管原教授をはじめとする衛生学教室の方々にも御礼申し上げます。

学術賞特別賞

耳鼻咽喉科学講座
宇佐美　真一　助教授

内耳の神経系には種々の神経活性物質が分布し聴覚や平衡覚の情報伝達に重要な動きを演じていると考えられている。内耳における神経伝達機構を明らかにするために、内耳における神経伝達物質やその受容体の分布、あるいは細胞骨格蛋白やカルシウム結合蛋白との関連について主として免疫組織化学的側面から検討を加えた。　ここ十年来、取り組んできた「内耳の神経伝達物質に関する研究」に対して名誉ある第一回の学術特別賞をいただき大変光栄に思っていると同時に今後ますますこの研究を発展させなければならないと思っております。

学術賞奨励賞

解剖学第一講座
一戸　紀孝　助手

一戸紀孝君は平成八年度の弘前大学医学部学術奨励賞を受賞しました。論文は英文で書かれていますが、論文の主な内容は眼に分布する自律神経の神経細胞（特に脳にある細胞）の連絡様式を電子顕微鏡を用いて定量的に解析したものです。彼はまた平成八年度の唐牛記念医学研究助成金も受けました。これらの上昇気流にのって彼は美人の奥さんと共に本年五月始めにアメリカに旅立ちました。留学は二年を予定しております。帰国後は医学の進歩にさらに貢献するものと期待しております。

（解剖学第一講座　教授　正村　和彦）

第一回弘前国際医学フォーラム

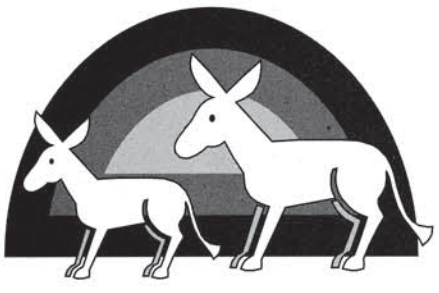
学内外の一流の研究者一堂に会する

来る十月三十日午後一時から、弘前市文化センターにおいて第一回弘前国際医学フォーラム”二十一世紀の細胞生物学「分子レベルから見た細胞の動き」“が開かれます。会長は遠藤医学部長、実行委員長八木橋教授、実行委員加地教授、泉井教授で、医学部鵬桜会の後援を頂きました。学生・教職員なら誰でも参加できます。

当日のプログラムは、招待者三人（内二人は海外から）と学内の三人によるシンポジウム「細胞の形態と機能・An Update」と、東大廣川教授、カロリンスカ研究所Hökfelt教授の特別講演が予定されています。また、学生を含めた自由討論形式でサテライトディスカッション「医学研究への招待」が行われます。皆で参加して弘前国際医学フォーラムを成功させよう！

なお、七時からはホテルニューキャッスルで懇親会が開かれますが、こちらは有料。

（佐藤記）



The 1st Hirosaki International Forum of Medical Science

21世紀の細胞生物学　『分子レベルからみた細胞の動き』

第1回
弘前国際医学フォーラム

と　き・1997年10月30日［木］午後1時～6時
ところ・弘前文化センター

■シンポジウム 1:00p.m.～4:00p.m.
「細胞の形態と機能・An Update」

1）Korf H-W（JW Goethe University 形態学センター教授）
Evolution and regulation of neurosecretory cells

2）泉井　亮（弘前大学医学部生理学教授）
Ion channel regulation by glucagon-like peptide-1 in pancreatic islet B-cell

3）加地　隆（弘前大学医学部解剖学教授）
Dynamic aspects of adrenomedullary structures in relation to pineal and intracranial sugery

4）宇佐美真一（弘前大学医学部耳鼻咽喉科学助教授）
Neurotransmission in the inner ear

5）外崎　昭（山形大学医学部解剖学教授）
Immunological kinship of photoreceptor cells of median and lateral retinas in lamprey

6）Mirsky R（University of London 解剖学教授）
Signals that control the development and differentiation of Schwann cells

■特別講演 4:00p.m.～6:00p.m.

1）廣川信隆（東京大学医学系大学院分子細胞生物学教授）
Molecular cell biology of cytoskeleton : Mechanism of organelle transport in the cell

2）Hökfelt T（Karolinska 研究所神経科学教授）
Plasticity in expression of neuronal and endocrine messenger molecules
; Mechanisms and functional aspects

■サテライトディスカッション 6:00p.m.～6:50p.m.（学生・講演者など自由参加）
「医学研究への招待」（英語・日本語による自由討論）

■主催
弘前大学医学部
弘前国際医学フォーラム
■後援
弘前大学医学部鵬櫻会

フォーラム事務局（連絡先）
弘前大学医学部病理学第一講座　八木橋操六　〒036 青森県弘前市在府町5　TEL 0172.33.5111（内線5025）FAX 0172.39.5026

聴講無料

編集後記

●「大学改革」と「開かれた大学」が求められている時代情勢に応じ、医学部情報紙の発行が教授会で決定した。一月中旬より数回、委員会を繰り返しながら、発行のコンセプト、広報内容等を討議の結果、教授会や各種委員会の決定事項のアナウンスなどを主な内容とし、学報や病院広報紙との記事の重複を避けることとした。即ち本紙のコンセプトは「学部公開と改革の方向性の明示」とし、タイトルについては論議のあったところだが、ナウイ「医学部ウォーカー」とした。

●巻頭言には遠藤医学部長にお願いしました。三人の新任教授の先生方はインタビュー形式で紹介することとした。

●本年度より学位論文の審査に予備審査会が導入されることになった。新川教授にポイントを解説していただいた。次号ではこれから学位取得のため研究中の皆様の疑問に対し、Q&Aを企画している。疑問点についての投稿を期待している。

●附属図書館医学部分館長に就任した工藤教授の図書館の改善に向けての積極的な方向性が示されている。私達の図書館の拡充が期待されます。

●本紙は年四回の発行予定で、皆様の多くの寄稿により更に紙面の拡充を図りたいと考えている。（棟方記）